元代における肖像画制作技法の研究
―剃髪形中峰明本像の想定復元制作を通して―

美術研究科文化財保存学専攻保存修復研究領域（日本画）
博士後期課程三年　山口美波

本研究は、高源寺蔵《普応国師像》（以下、高源寺本）および選佛寺蔵《中峰和尚像》（以下、選佛寺本）の制作技法を考察し、下図制作技法に着目してその技法的差異を考察するとともに、現存しない、画僧によって描かれた剃髪形中峰明本像の想定復元制作を行うことで、元代肖像画の制作技法を視覚的に提示するものである。

元代の禅林を代表する高僧である中峰明本(1262-1323)は漂泊生活のなかで修行と教化につとめ、貴顕からも厚い帰依を受けた。その頂相は画僧、画工、文人といった様々な制作主体によって制作され、日本にも多様な図像の作例が現存している。宋元時代は肖像画の制作主体と表現が多様化した時期であり、日本の肖像表現にも大きな影響を与えた。中峰明本自賛像の作品群は同時代の多様な肖像画制作の状況を反映した好例であり、制作主体によって作品の表現技法が異なることが指摘されている。各作品の成立や制作状況については詳細な論考が行われており、画僧作とされる高源寺本は線描を重視した統一的な表現が、画工作とされる選佛寺本は華やかな色彩がそれぞれ評価されてきた。

しかし、高源寺本と選佛寺本はともに伝統的な頂相の様式に則っており、肉身部に裏彩色が用いられるなど共通点も多い。そのため両作品の表現の差異は、画家の性質に起因するという言及にとどまり、具体的な技法的差異の詳細が曖昧であるという問題があった。

この問題には、前近代の肖像画に関する技法的研究自体が少ないという現状も関係している。肖像画は像主やその周辺の人々による記録や情報伝達を大きな目的として制作される、情報伝達媒体の機能を持つ。そのために芸術性という評価軸から一歩下がった所に置かれてきたことが、肖像画の技法研究があまり行われてこなかった理由の一つだろう。また、肖像画には礼拝や贈答といった膨大な需要が存在し、円滑な制作のために紙形（頭部の下図）を利用した着せ替え式の下図構成方法が広く行われた。この紙形技法も、肖像画の様式化、形式化の要因とされがちである。

しかし、下図の構成方法は作品の制作プロセスと密接に関連し、画家の制作志向を知る事ができる重要な要素である。もし本画の制作技術が一見似通っていたとしても、下図や紙形といった本画以前の技法に目を向けることによって、画家それぞれの制作理念や制作環境の手がかりが得られる。特に、宋元時代という肖像画家の階層が多様化した時代の考察においては、画家の制作理念を探ることの重要性は大きい。

また、近年では琉球国王の肖像画である御後絵の復元プロジェクトが行われ、制作技法や、中国、韓国の肖像画との関係も詳らかにされるなど、肖像画の技法研究の機運が高まっている。本研究で扱う元代は、実践的な肖像画論である『写像秘訣』が著されて明代以降の肖像

画隆盛の土台が形成された時代であり、実作品に基づいた制作技法研究の蓄積を進めていく意義は深いと考える。

なお本研究の動機は、筆者が元々白描図像の線描表現に関心があり、粉本・図像と呼ばれる絵画のつながりから紙形という存在を知ったことに起因している。鑑賞画としての粉本や肖像画は、いずれも鑑賞者が主体的に絵を読み、イメージを想起することではじめて成立する絵画である。このような情報伝達媒体としての絵画の再評価も念頭におきながら、絵画制作者の立場から考察を行った。

本研究では、中峰明本の頂相を題材として、元代肖像画の制作主体による技法的差異と、その制作工程を実技的に考察する。また現存しない剃髪形中峰像の想定復元制作を研究の総括とし、筆者自身による図像・下図構成の作業を通して、“画僧画的肖像画”の制作理念を考察しながら研究を進める。以上を本研究の論点として、第 1 章では、前近代における肖像画制作技法に関する先行研究の確認と、『写像秘訣』を中心とした資料に基づいた技法の考察を行った。

第 2 章では、高源寺本および選佛寺本の調査結果に基づき、制作技法と制作工程を検討し、その制作理念について考察した。

第 3 章では、現存しない、画僧作の剃髪形中峰像の想定復元制作を行った。この想定復元制作は、井手誠之輔氏の中峰像の図像共有に関する指摘に基づくものである[1]。井手氏は中峰像の図像が蓬髪形・剃髪形に大別でき、その図像がまず画僧など中峰周辺の画人によって制作され、その後画工へ共有されたと述べる。蓬髪形像と剃髪形像の顔貌表現は異なり、二系統の紙形が存在した可能性が高い。しかし、蓬髪形像については画僧・画工それぞれの作例が現存するが、剃髪形像に関しては画僧による作例は知られていない。筆者は中峰像の現存作例の中に、共通の図像を持つ剃髪形の作品群が存在し、その中には自賛像に基づく可能性が高い作例も含まれることに着目した。この作品群の共通の祖本が、中峰像の図像共有の流れにおけるミッシングリンク的存在である「画僧の手による剃髪形中峰像」であったと仮定し、絹本着色作品としての制作を行った。

終章では、想定復元制作を受け、元代肖像画の制作技法の特徴と、肖像画および肖像粉本の価値を述べて結論とした。

---

[1] 井手誠之輔「中峰明本自賛像をめぐって」『美術研究』(343),東京文化財研究所,pp.19-36,1989-2